

エドワード・ジェンナーの像(その2)

大阪大学微生物病研究所
加藤 四郎

モンテベルデ作の大理石像

本誌前号(18巻1号)に、明治26年発行の東京医事新誌の付録として「ジェンナー氏其子息ニ牛痘試種ノ図」が出版されたことを紹介した。この図は、イタリアの彫刻家モンテベルデ(Giulio Monteverde)が作製した大理石像を写したものである。またこの図は、明治時代の尋常小学修身書(第4学年)をはじめ、少なくとも10指に余る出版物に載せられてきたものであり、日本人にとって最もなじみの深いジェンナー像といえる。

ところが不思議なことに長年にわたり、この像を実際に見た人はもとより、正確な所在を知る者もなかった。藤野恒三郎先生(現阪大名誉教授)は、1940年頃よりこの像の所在を追求され、ついに1969年にこの像がイタリアのジェノア(Genoa)のPalazzo bianco(白い宮殿)なる美術館にあることを、この美術館長よりの手紙で確認された。







図3.

私は、藤野先生の情報をもとに更に紆余曲折の経緯を経て、1981年8月3日(月)に、この館に到り、大理石像に接するとともに、撮影することに成功した。40年余の師弟2代にわたる探索の結果であり、その時の興奮は忘れ難いものとなった。

この像はモンテベルデにより1878年に「ジェンナーがその息子に種痘している像」として作製され、同年パリで開かれた万国博覧会に展示され、金賞を得たものである。極めて写実性に富んだもので、ジェンナーの鋭い眼差しと、あどけない幼児の顔が見事な対比をなして、見るものに深い感動を与えるものとなっている。



図4.

図1. Palazzo bianco の庭より建物を写す。
図2. (見開きページ)

Palazzo bianco にあるジェンナー像

図3. ジェノアの美術館 Palazzo bianco は、この Garibaldi 街をはさんで Palazzo rosso (赤い宮殿) と面して位置している。何れも元貴族の館であったが、現在はジェノア市に所属している。左手前の建物に続く樹木の見える処が Palazzo bianco である。

図4. Palazzo bianco より、向かいの Palazzo rosso を写す。

(図1～4, 1981年筆者撮影)